

《研究ノート》

伝記家ジョン・オーブリとその方法

——イギリス伝記文学近代化の一点——

石井正之助

イギリスの伝記文学の濫觴をどの世紀のどの作品に求めるかは容易に決めがたい。十六世紀に入って「リチャード三世史」(Thomas More, *The History of King Richard the thirde*)、「トマス・モア伝」(William Roper, *Life of Sir Thomas More*)、「ウルズレイ伝」(George Cavendish, *Life of Wolsey*)が書かれ、その題材においては国王・宰相級の人物を取扱って、歴史から全く独立したとは言いがたいが、個人の性格に興味を持ち、記述の眼を外的事件から内の人間に向ける態度を示していることは、近代的伝記文学の誕生の間近いことを告げただけである。

十七世紀はその旺盛な好奇心、人間心理に寄せる興味、学問研究への熱意、歴史および文学に対する関心、表現手段としての英語散文文体の発達などによって、純粹な伝記文学の出現を見る素地を備えていたと言えよう。しかし機はまだ熟さなかつ

た。国内の政情の不安、ひいては国民の精神的動揺が、腰を据えて個々の人間を観察し、その伝記の製作に没頭する余裕を与えず、従来の方法によって事件中心の歴史的考察を進め、あるいは伝記的資料の断片を集める程度で、人間の類型を描くいわゆる「キャラクターもの」からさらに一步を踏み出すまでには至らなかった。これにはフルーターク——その「英雄伝」のノース(Thomas North)による英訳は一五七九年——や、セオフラスタス——その *Characters* (人さまざま)——の影響も考えられる。

世紀の後半に入って一六六二年にフラーの「英国名士録」(Thomas Fuller, *The History of the Worthies of England*)が出版されたが、この中に初めて「biographer」という語が表われ、約二十年後に詩人ドライデン(John Dryden)が「biography」という語を初めて使う。これらの語によって意味されるものはすでにあつたにせよ、名称の誕生は意識的な「伝記」製作への努力が始められたことを物語るものと受取ってよいであろう。この世紀の伝記作品として第一に挙げられるのはウォルトンの五つの作品、すなわち一六四〇年刊の「ダン伝」(Izaak Walton, *The Life of Dr. John Donne*)、五年の「ワットン伝」(*The Life of Sir Henry Wotton*)、五年の「フッカー伝」(*The Life of Mr. Richard Hooker*)、七〇年の「ハーバート伝」(*The Life of Mr. George Herbert*)、七八年の「サンダーソン伝」(*The Life of Mr. Robert Sanderson*)である。これらは題材は従来に類徳もしくは教化のための伝記

と同じく、政治家・宗家を扱いつつながら、その記述には意識して芸術的な効果を挙げようとする努力が見られる。描かれた人物は作者の好みに合わせて理想化されすぎた嫌いはあり、記された事実は必ずしも信用しうるものばかりとは言えないが、同情と敬意と誠実に溢れ、時にはほのかなユーモアを混えた筆致で、努めて正確な記述を心がけ、故人の書簡を引用し、想像の会話を挿入して、読者の興味を掻き立てる工夫を怠らない。伝記作家としてのウォルトンに対しては、その高い文学性を認め、温かいヒューマニティと諦観の哲学を十分に評価しつつ、「聖徒列伝」の残滓や主観的な抒情趣味を非難するのが通例であるが、伝記文学の領域における中世的なものと近代的なものとの懸橋としての地位をこの半専門家的伝記作家に与えることは許されよう。

ウォルトンとは全く逆の方向に徹底した一六六八年のスプラットの「カウレー伝」(Thomas Sprat, "An Account of the Life of Mr. Abraham Cowley")は、無味乾燥、非文学的な客観性と、形式的な皮相な分別性に終始して、伝記文学としての魅力を残さず、一文人の生涯を題材とした点で注目に値するものである。すでに詩人・劇作家を収録した人名辞書の類は十六世紀中葉に現われ、この世紀にも何点か優れたものが作られたが、個々の作家についての記述は簡単なものが多かった。また信仰に殉じた男女(時には賤しい身分のものも含めて)の生涯が教化を目的として編纂されることは前世紀以来しばしば見られることであった。しかし同じ世紀に属し、しか

も前年物故したばかりの一詩人の詳細な伝記を編むことは殆ど例のないことであった。このスプラットの作品とほぼ時を同じくして、王侯・貴族・将相・高僧はもとより、文人・科学者・哲学者・神学者からさらに法律家・商人・発明家・教師・航海家・美術家・手品師、下っては無頼漢・盗賊に至るまで、社会のさまざまな層にわたっての個人の伝記的資料を集め、そこに展開する個性的な生の営みに好奇の目を注ぎ、よくその特徴を捕えて精彩ある表現を与えた伝記家の誕生が、むしろ偶発的な形で実現されたのである。その伝記家が当時好事家、好古学者として名の聞えた、ウイルトン、マームズベリの人ジョン・オーブリー(John Aubrey, 1626—97)である。

二

オーブリーの生涯をここで詳細に跡づける余裕はない。ただ彼の一生を通じて大きな影響を及ぼした同郷の先輩、哲学者ホブズ(Thomas Hobbes, 1588—1679)と、伝記家オーブリーを生む直接の機縁となったウッド(Anthony a Wood, 1632—95)との出会いを中心としてその概略を瞥見してみよう。

オーブリーは八歳の頃近くの村に住むラティマー(Robert Latimer)にラテン語の手ほどきを受けたが、この人はすぐれた古典語学者で、一五九〇年代にホブズもこの人の薫陶を受けたことがある。一六三四年の夏たまたま故郷に帰って旧師を訪れた五十五歳の哲学者は、クラスの中に一きわ目立つ利発なジョン・オーブリー少年に心を惹かれ、翌日はその少年の縁者を訪

れて幼い後輩の才気に重ねて深い愛着を覚えたようである。後年オーブリは当時のホップズの印象を、「氏は礼儀正しく、動作はきびきびして、服装も大変立派であった。髪は黒く、しつとりとした卷毛があった。ベン・ジョンソン (Ben Jonson) やエイトン (Ayton) 氏のことをたびたび話題にした。……」と記している。これ以後「レヴァイアサン」の著者との交渉はホップズの死に至るまで続き、オーブリは彼の伝記中の最長篇「ホップズ伝」を追慕の情をこめて書き上げることとなる。

オーブリの父は祖父以来の莫大な家産の管理に心を勞する病弱の人で、子供の教育にはあまり熱心でなかったらしく、殊に少年オーブリが示した古事・古物への興味・関心には冷淡であった。オーブリは屋敷内で働らく職人たちの仕事振りをあかず眺め、エリザベス朝の名士の何人かと交際のあった母方の祖父からマームズベリの古い修道院の話聞いて喜び、ことに絵筆をとって草花や風景を描くのに無上の楽しみを見出していた。

一六四二年、十七歳の時オックスフォードのトリニティ学寮に入り、内乱の騒ぎに家に呼戻されたが、四六年父を説いて再び出郷、ミドル・テムブルの学生となった。この法学院に在学中の二年間に将来の広範囲にわたる交友関係の基礎がきざされ、後の「伝記」の資料収集に多大の便宜を得る途が開かれた。四八年父の病気のため帰郷、モールバラの近くで先史時代の遺跡を発見したのもこの頃で、彼の好古学は考古学への脱皮をとげつゝあった。五二年父が死に、家産の他に莫大な負債の処理と二人の弟の世話が彼に遺された。以後オーブリの生活は財産を

めぐる訴訟問題に頭を悩ましながら、その好む学問、調査と、論文・報告類の著述に没頭する、俗事と趣味の二筋に進められていく。六二年、三十六歳の時新設の英国学士院の特別会員に選ばれた。オーブリと同時に会員に選ばれた人の中には詩人ドライデン、建築家レン (Christopher Wren)、物理学者フック (Robert Hooke) などがあり、推薦者にはブラウン (Thomas Browne)、ホッブズ、ロック (John Locke)、ニヒートン (Isaac Newton)、ホイール (Robert Boyle)、ウォラー (Edmund Waller)、ブーズマン (Andrew Marvell)、イーヴリン (John Evelyn) など当代一流の人々が名をつらねていた。オーブリの得意さは察するに難くない。

オーブリは女性に関しては幸運にめぐまれなかった。最初に彼が結婚を望んだ婦人との交際は、母親の落馬による重傷という不慮の出来事に阻まれ、第二、第三の意中の人との結婚も実現せず、時にはいかがわしい婦人との交際に健康をそこない、最後には彼の財産を狙って結婚を企んだらしいサムナー (Joan Sumner) という女性のために数年間の裁判沙汰のすえ、財産の殆どすべてを失い、イエズス会の修道士になることを真剣に考えたり、あるいはアメリカ移住をすゝめられたりした。この間にもオーブリは友人、縁者の援助を受けつゝサリ州の地理・地質調査、エイヴベリの古跡研究などを続け、喜劇二篇を書き上げている。この経済的破綻の数年前、六七年の八月、当時オックスフォードの町および大学の歴史を調べて一篇の論文を書き、さらにクライスト・チャーチ学寮の学生監フェル (John

ゴ(11)の委嘱を受けてオックスフォード出身の文人、宗教家の人名辞書「オックスフォード集英」(*Athenae Ozoniensis*)の編纂に着手していたアントニー・ア・ウッドとの交渉が始まった。ウッドはオーブリに劣らない古事・古物に対する愛を持ち、中世の文化に対する理解も深く、精力的な研究者であったが、その性格は自己中心的で、人を容れる度量に乏しく、嫉み深く、感謝の心の薄い、およそオーブリと正反対の人物であった。従って多くの優れた友人を持ち、接する人の誰からも好意を持って迎えらるるオーブリの協力を得られるならば、伝記の資料収集に極めて好都合と判断したのである。たまたまウッドの著書を書店の棚に見出し、その内容に同学者としての興味と敬意を覚え、書店主同道でその著者を訪れたオーブリの援助の申出を快よく受けたのである。こうしてイギリス伝記文学の歴史に残る二人の奇才の協同作業が開始されることとなった。

オーブリのウッドに対する助力は最初のうちは相互の敬意と尊重によって友好的に進められたが、やがてウッドは、自己の見識を持って必ずしも指図のままには動かないオーブリに対し次第に高圧的の態度に出る。時にはウッドの手紙は十数カ条の項目を挙げてその調査を命ずることもあった。参照すべき文献のない当時に於て、オーブリはまずその友人に尋ね、伝手を求めて故人の近親・知人にあい、教会の記録を繰り、墓石を調べ、故老の記憶を引出すなど、文字通り東奔西走して草稿を作り、その粒々辛苦の結晶の「伝記覚書」(*Minutes of Lives*)をウッドに供給した。やがて一六九一年に *Athenae Ozoniensis*

の第一巻が、翌年第二巻が出版されたが、同書中の記載が *Cart-andon* 伯の収賄をほめかしたため、ウッドは名誉毀損の嫌で大学副総長の取調べを受け、遂に同書二巻は焼却の憂目を見ることとなった。ウッドは右の記事はオーブリの提供したもので、この災厄はすべてオーブリの軽率な「覚書」によるものとし、深い怨恨と敵意を抱くに至った。すでにカトリック信者の嫌疑をかけられて周囲から不評を買ひ、オーブリの苦心の原稿を寸断改竄してはばからないウッドの態度に、その手稿の安全を危惧していたオーブリは、ウッドの手からその回収を企て、オックスフォードに友人アシムエウルの寄贈した古文書・蔵書中に加えてのその保管を依頼した。オーブリを「風来坊主、うじ虫頭の能なし、時には気狂い同然、人の言葉を何でも信じ、私によこす手紙はばかけた誤だらけ、大迷惑を蒙ることしばしば」ときめつけたウッドは、寛容なオーブリの和解の申出にも冷たく、九五年ウッドの死によって遂にこの二人の交渉は不和の中に永遠に断たれてしまった。オーブリは二年後「伝記覚書」その他未刊の手稿をいくつか残して九七年六月、七十一歳で世を去ったのであった。

三

オーブリの「伝記」がはじめて印刷公刊されたのは一八一三年のことである。すなわちプリス (*Philip Bliss*) とウォーカー (*John Walker*) を編者として (と称せられた) *Letters written by Eminent Persons... and Lives of Eminent Men by John*

Aubrey, Esq. (2 vols.) の第二巻の約四百四十頁がオーブリの「伝記」を収録した。ただし校合不十分で誤りや恣意的な省略が目立つという。一八九八年クラーク (Andrew Clark) が編纂した *Brief Lives, chiefly of Contemporaries, set down by John Aubrey, between the Years 1689 & 1696* (2 vols.) が標準版であるが、ウィクトリア朝の学者の手にかかってオーブリの大胆な表現が所々刈り込まれた憾みがある。その欠を補うのが一九四九年の Anthony Powell (ed.), *Brief Lives and Other Selected Writings by John Aubrey* と一九五〇年の Oliver Lawson Dick (ed.) *Aubrey's Brief Lives* である。以下これらの三つの版に収められた「伝記覚書」によって伝記家としてのオーブリの特色を探り、伝記文学の歴史に占めるその位置を考えてみたい。

オーブリの「覚書」が従来の伝記と異なる点の一つは、前に触れたようにそこに取扱われている人々が、社会の最上層から最下層にまで及び、地位職業の如何にかかわらず、まず人間として興味の対象となっていることである。しかもそれぞれの人物の性格を示す特徴の一、二を的確に把握して、それに精彩ある簡潔な表現を与え、文字通り 'minute' な 'minutes' を書残している。その観察の細かさは、伝記中の人物の容貌の描写にも見られる。例えば彼の敬愛してやまなかつたホップズは「あまり大きからぬ顔、広い額、頬髯は黄ばんだ赤毛で、生れつきはね上っていたが、きびきびした知力の微し、顔の下半分はきれいに髭をそり、ただ口の下に少し残してあった。立派なあご

鬚をはやしてはやせないことは決してなかったが、生来快活な気性の人で、威厳をつくってえらく見せようなどとはしなかった。その聡明さの評判を、鬚の立て方で得るよりは、理性によって得ようとしたのである。」「彼は立派な目を持っていた。はしほみ色で、常に活力と精気にみちていた。議論に熱してくると、その目の中に燃えさかる火が輝くようであった。目つきに二種類あって、笑う時、機知を働かせる時、快活な時には目は細められて殆ど見えなくなるのだが、やがて、真剣に積極的になると、目は丸く見ひらかれるのであった。その目の大きさは、大きすぎもせず、小さすぎもせず、中位であった。」

幼時から絵を好んでかいたオーブリの描写力が、人の容貌、殊に目に強く注がれているのは、目が人の心の窓であることを考えてであろう。フランシス・ベイコンの目は、「優しい生き生きしたはしほみ色の目であった。ハーヴェイ博士は私に語って嫂の目を思わせると言ったが。」そのハーヴェイ (William Harvey) 血液の循環を発見した、筆者注) 自身は、「背は高くなかった、むしろ大変低い方で、丸顔、顔色はオリグ色、目は小さく、丸く、真黒な瞳は精気にみちみちていた。」劇作家ベン・ジョンソンの目は、「片一方の目が今一方の目より低く、大きく、俳優の克蘭 (Clare) に似ていた。ひょっとすると彼が克蘭の父親だったのかも知れない」と思われるようなものであり、「失樂園」の詩人ミルトン (John Milton) の目は、「とびぬけて白い、茶色の髪をもった瓜さね顔」の中の「濃い灰色の目」であり、風景詩人デナムの目は、「薄いとび

色がかった灰色で、あまり大きくない。光り輝やくというほどではないが、不思議な鋭さがあった、対談中に相手が心に思うことを見抜くような、モーマスの神(嘲笑の神、筆者注)を思わせるものがあった。」風刺詩人兼ジャーナリスト、バークンヘッド (John Birkenhead) は、「実に胆の大きい、自信たっぷりな、機知に富んだ人で、恩義を受けた人に対してもあまり丁寧でなく、ひどい嘘をつくこともあった。中肉中背で、大きなギョロギョロ光る目をもち、感じのよい人相ではなかった」し、オーブリが学んだトリニティ学寮の長ケッテル (Ralph Kettell) の目は、「鋭く、灰色で、その顔に厳しさを与え、若い学生を強くたしなめる」力を持ち、英国学士院主事で振子時計の発明者フック (Robest Hooke) の目は、「丸く、とびで、あまり敏捷には動かない、灰色の目」であった。

オーブリの写す有名無名の人々の目のカタログを詳しくすれば際限はない。目に限らず、髪の毛の色、肌の色、鼻の形、その他、オーブリの人相書の方法は、「次のものについて述べる、顔、目、額、鼻、口、眉毛、顔の形、色、身長、姿かたち(きしゃやか、大柄か、均整がとれているか、その他)、頭の形、大きさ、肩(大きいか、丸いか、等)、腕、脚、はどうか」と徴に入り細にわたって、まぎれもない博物学者、考古学者の方法である。しかもこのような容貌の特徴を具えた主人公たちの、性格上の特徴、その習慣と趣味、教養、交友関係、逸話に、時としては傍から見て肩唾もののゴシップに、無上の価値を認めるオーブリは、類型的な人間像の中世から、はっきりと近代

に足を踏み入れていると言つてよいであろう。

オーブリの魅力は、簡潔な筆致で語られる逸話や、その中に流れる巧まざるユーモアにも見出される。例えば、大哲学者ホップズの「常に机上に譜入りの歌曲集をおき、夜床に就いて後、扉を固くとざし、聞く人の無いのを確かめてから大声で歌をうたった、(声がよかったわけではない、健康のためで、肺を強くし、長寿を保つのによいと思つた)習慣や、「年老いて頭が禿げたが、家の中では勉強するのに頭をむきだしにして坐っていた。そしていわく、そのために風邪をひくことはないが、一番面倒なのは禿げにとまるは、ええを追い払うことだ」という愚痴など。また大数学者兼牧師のエドマンド・ガンター (Edmund Gunter) が大学在学中に受難の主日にした説教を立派な牧師連がきいたが、評判は「主イエスは御受難以来今日の説教ほどひどいめにあわれた事はあるまい」ということで、「だれでも万事に秀でるといふことは不可能」とオーブリは注する。神学者兼詩人のゴフ (Thomas Goffe) は多年の女嫌いであったが、節をまげ、友人シンブル (Thomas Thimble) の忠告をも斥け前夫の子供を何人かつれた未亡人の偽りの愛の言葉に負けて結婚する。この婦人がクサンティッペはだしの悪妻で、ゴフの友人たちの鼻つまみとなり、ゴフ自身やがて病の床につき、「オラクル、オラクル、トム・シンブルと叫んで、その魂を天に返した」という。

オーブリの「覚書」の中にふんだんに見出されるユーモアやウィットに富んだ味のあるゴシップは、それについて述べるも

のに引用を打ち切るのに大きな困難を感じさせる。ことにその文体の魅力を分析するには、原文を惜しみなく引く必要がある。しかし今はその一、二の例を挙げるに止めなければならぬ。次はフランシス・ス・コン伝の一部(綴りは改めた、筆者)

His Lordship being in York-house garden, looking on fishers as they were throwing their net, asked them what they would take for their draught: they answered so much; his Lordship would only offer so much. They drew up their net and there were only 2 or 3 little fishes: his Lordship then told them it had been better for them to have taken his offer. They replied, they hoped to had a better draught. But, said his Lordship, Hope is a good breakfast but an ill supper.

(卿がヨーク荘の庭園におられた時、漁師たちが網を打つ のを見て、その一引きの魚の値をきかれた、彼らがいくらいくらと値をつけると、卿はいくら出そうとしか言われなかった。網をあげてみると魚は二、三匹の小さなものしか入って いなかった。卿は自分の値で承知すればよかったものと言 われた、漁師たちはもっと入るかと思いましたがと答えた。し かし卿曰く「あてごとは朝食としてはよいが夕食には向かぬ」と)。

詩人兼建築家デナム (Sir John Denham) 伝の一部を引け

ば(綴り、同上)

He was generally temperate as to drinking, but one time when he was a student of Lincoln's Inn, having been merry at the tavern with his comrades, late at night, a frolic came into his head, to get a plasterer's brush and a pot of ink, and blot out all the signs between Temple Bar and Charing Cross, which made a strange confusion the next day, and 'twas in term time. But it happened that they were discovered, and it cost him and them some moneys. This I had from R. Estcott, Esq., that carried the ink-pot.

(彼はふだんは酒も度を過ぎなかったが、リンカン法学院の学生の頃、夜おそく、友達と浮かれて、いたずら心をおこし、左官の刷毛とインキ壺を手に入れると、テンプル・バーからチェアリング・クロスの間の店の看板をすべてぬりつぶしてしまった。翌日は大騒ぎになった、丁度節季であった。結局下手人は見つかり、彼も仲間も金をしぼられた。これはインキ壺を持って歩いたエストコット氏から聞いたこと)。

オーブリが、その文体の魅力ゆえに、薬味のきいたゴシップゆえに読まれるほかに、彼の供給する十六、七世紀イギリスの有名無名の四百余人の伝記資料が貴重なものであることは言うまでもない。ただその信憑性には勿論限度がある。むしろ 'credulous Aubrey' の聞書には十分注意が払われなければな

らないのである。しかし彼の手稿の一句一行に、行間のごかしこに、個人の生涯の記録としての真偽をこえて、文芸復興期イギリスの社会の片鱗が覗いていることは否めない。イギリスの社会史、経済史、科学史等の肉づけのための資料は、専門家の眼による仔細な渉猟検討を待ちつつ、「伝記覚書」の中に眠っているのである。さらに文学史家もオーブリが十八世紀のジ

ンソン (Samuel Johnson) やボズウェル (James Boswell) のために本格的伝記文学の道を開いた事実を、ウォルトン、ポープ (Walter Pope) ノース (Roger North) らの作品と比較しつつ、詳細かつ精確に究めなければならないであろう。

(一橋大学講師・東京学芸大学教授)